

木下勇治

きのした

ゆうじ

いちばん目を引くクロッチの看板

1・8メートル四方の大きなキャンバスいっぱい、オイラの顔を描いてくれたのは木下勇治さん。展覧会では、表通りに面したストライプハウスギャラリーのウインドウから真っ先に目に入る「看板」は、来場者や通行人へのアイコンという重要な役割を担うアイコンだ。しかも、この絵は他のアーティストが手がけるトリックアートでも一役買うからね。

作品では、「目力の強さと口もとのクロッチらしさを見てほしい」と語る木下さん、顔の輪郭線にはこだわった。人にはなつかない、のら猫の矜持がモチーフとしての魅力だという。

子どものころから絵が大好きで、マンガ家のアシスタントを務めた経験を持つ木下さんだけでなく、はじめて描く大きな絵の構



図や色合いのバランスには苦勞したという。単純なオイラの顔が、インパクトがありながらも趣き深い「肖像画」に仕上がった。アクリル絵の具で描いた絵を囲むお手製の木枠は、江戸っ子クロッチの「和」の雰囲気を出すために、自ら黒く染めあげた。

「仕事は生きがい」という木下

最後に、自分を動物に例えるのと？と尋ねてみた。いつも白と黒の洋服を着ているので、友人からペンギンと言われる木下さんだが、「自分では猫に似ている」と言う。気ままに時間に流されずに生きる猫。静かにさりげなく、いつのまにか周囲を和やかな気で包んでいく。そんな猫だと感じたよ。

クロッチ作品を創るラッキーマイクワイドの造形作家たち。

3

佐藤愛子

さとう

あいこ

見る。というより、
どンドン触ってほしいです

作品の見どころを尋ねると、こんな答えが返ってきた。佐藤愛子さんの作品は、ズバリ、「肉球」だ。しっとり吸いつくその感触は子猫の肉球そのもの。

作品では、猫好きだけでなく、さまざまな人を引きつける「やわらかな弾力」と「かわいい色」を追求した。素材選びでは苦勞したが、最終的に、柔らかすぎず固すぎないラテックス（ゴム手袋の素材）を使用した。

オイラが驚いたのは、佐藤さん



が作品に使用する材料を独自に作りあげていたことだ。まず、透明の液状のラテックスに色を混ぜ、肉球のピンク色を調合する。そのピンク色の液をエアガンで何度も吹きつけて作りあげた薄いシートが肉球の材料となったのだ。今、巷には無数の材料や素材がある。でも、イメージにあうものがない時には、妥協せずにオリジナルの材料を自ら作る努力と手間を惜しまない。今回の作品で、はじめて自分ひとりで素材も形も考えた。先輩たちには「凄い！」と感心す

先

ることばかりだというのが、すでに佐藤さんの中にも「職人魂」が確実に育まれていると感じたよ。
幼い頃から「こねくりまわすこと」が好きだった佐藤さんは高校、大学とも彫刻を専攻した根っからの彫刻女子だ。入社当時は、一定の時間でこなせる仕事量が全くわからなかった。入社3年目の今、「自分の能力がわかってきたことがつらい」。「時間に追われ、あせる気持ちの仕事に反映することもつらい」と語る。だからこそ、自分が担当したパーツが完成した時、美術館やテーマパークに作品が展示されたのを見た時、喜びはひとしおだ。

入社まもなく、エアガンで塗装の訓練をした。使い方の加減先輩方に質問すると「慣れてね」との答え。2年目にして先輩の言葉に納得する。「どンドン失敗して慣れるしかない」と。そして3年目、エアガンを使って独自の作品を完成させた。

最後に、自分を動物に例えるのと？と尋ねたら、「猫です」「飽きっぽくて気まぐれだから」と言いつつも、「いったん仕事となれば集中して向き合います」と佐藤さん。狩りの時には全身全霊で集中する猫！だね。